

研究ノート | Research Note

プロ野球史における「天狗倶楽部」の
立ち位置を考える:

「みる」「みせる」野球の流れのなかで...

Considering the Position of "Tengu Club"
in the History of Professional Baseball :
In the Flow of Baseball in "See" and "Show" ...

佐野 慎輔

SANO, Shinsuke

尚美学園大学スポーツマネジメント学部

Shobi University

2023年12月
December 2023

研究ノート

プロ野球史における「天狗倶楽部」の 立ち位置を考える： 「みる」「みせる」野球の流れのなかで…

佐野 慎輔

Research Note

Considering the Position of “Tengu Club” in the History of Professional Baseball: In the Flow of Baseball in "See" and "Show" ...

SANO, Shinsuke

要 旨

2023年の日米野球界はMLB ロサンゼルス・エンゼルスの大谷翔平選手の活躍や国別対抗戦ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）での日本の優勝が大きな話題を集め、日本のプロ野球でも人気の阪神タイガースの38年ぶりの日本一で盛り上がりを見せた。野球の楽しさを満喫した年であった。では、その野球を「みる」楽しさ、野球を「みせる」意識はどこに端を発しているのか？ 筆者は野球が日本に“輸入”された明治期にすでに「みる」「みせる」意識の萌芽があったと考える。新橋アスレチック倶楽部を結成した平岡熙によって始まる「野球をみせる」意識はその後、早稲田大学野球部出身者を中心に結成された「天狗倶楽部」に受け継がれた。このクラブは勝利を目的に結束する集団ではなく、多士多彩な会員が緩やかに連帯していた集まりである。野球界の墮落ぶりを批判する東京朝日新聞の連載をきっかけに1911年に巻き起こった「野球其害毒」論争では野球擁護の論陣を張り、東京朝日に対抗したことで知られる。しかし、プロ野球の歴史に登場することは少ない。改めて「天狗倶楽部」を再評価し、その野球史における立ち位置を論じる。

Abstract

In the Japan-America Baseball in 2023, the success of Shohei Otani of the MLB Los Angeles Angels and Japan's victory in the World Baseball Classic (WBC), a national competition, are attracting a lot of

attention, and the Hanshin Tigers are also popular in Japanese Professional Baseball. The team's Japan Champion for the first time in 38 years sparked excitement. It was a year in which I enjoyed the joy of Baseball. So, where does the joy of "watching" baseball and the desire to "show off" baseball originate? The author believes that the idea of "seeing" and "showing" baseball was already budding in the Meiji period when baseball was "imported" to Japan. The idea of "Showing Baseball" started by Hiraoka Hiroshi, who founded the Shimbashi Athletic Club, was later inherited by the "Tengu Club," which was formed mainly by former members of Waseda University's baseball club. This club was not a group united for the purpose of victory, but a loose association of diverse members. He is known for taking a stand against the Tokyo Asahi newspaper in favor of baseball during the "Yaku Sono Gaidoku (The Poison Brought by Baseball)" controversy that arose in 1911 after a series of articles in the Tokyo Asahi Shimbun criticizing the corruption of the baseball world. However, it rarely appears in the History of Professional Baseball. We will once again evaluate Tengu Club and discuss its place in Baseball History.

キーワード

天狗倶楽部 (Tengu Club)／みる・みせる (See/Show Baseball)
 学生野球 (College Baseball)／職業野球 (Professional Baseball)
 平岡熙 (Hiraoka Hiroshi)
 野球其害毒 (The Poison Brought by Baseball, Baseball Issues)

1. はじめに～「みせる」意識に着目して

1.1. 「みせる」野球の話題が沸騰した2023年プロ野球公式戦⁽¹⁾

2023 (令和5) 年、日本の朝を大谷翔平が変えた。MLB (Major League Baseball) ロサンゼルス・エンゼルス投手の中心である大谷選手の活躍に日本中が一喜一憂し、「きょうのオオタニ、どうだった?」と聞くことが習わしのようになった。9月にはいって右ひじ、右わき腹の故障が発覚し欠場、損傷した右ひじ内側副靭帯の再生手術、通称トミー・ジョン手術を受けてからも、「オオタニはどうなる?」と話題になった。そして日本人選手初のMLB本塁打王が決まり、2度目のアメリカン・リーグMVP受賞によってさらに話題が沸騰した。

その大谷選手を中核とした侍ジャパン、野球の日本代表が世界一を決める国・地域対抗戦WBC (World Baseball Classic) に2009年以来3大会ぶりの優勝を飾り、「にわかファン」の出現が社会現象となったのは3月である。「にわかファン」は大谷選手をきっかけにMLBに興味を抱かせることになった。日本のプロ野球 (Nippon Professional Baseball Organization) 公式戦にも大きく余韻を残し、人気球団である阪神タイガースの好調ぶりがプロ野球への関心を復活させた。そして2020年初頭から新型コロナウイルス感染禍による「規制」「制限」で縛られてきた野球ファンはその鬱憤をはらすかのように声高く声援を送り、「解放感」を満喫した。阪神が2005年シーズン以来18年ぶりとなるセントラル・リーグ優勝を果たして観客動員は急増。2023年シーズンのセントラル、パシフィック両リーグ合わせた公式戦入場者数は25,070,169人で1試合平均29,219人となり、コロナ前の2019年26,536,962人1試合平均30,929人には届かなかったものの、2016～18年度に続く29,000人台を記録した。⁽²⁾ 阪神はその後の日本シリーズに勝利し1985年以来の日本一に輝いた。

また新型コロナが5月8日からの「5類感染症」移行に伴い、応援が解禁された「夏の甲子園」

(1) 朝日新聞、読売新聞、産経新聞

(2) 日本野球機構 (NPB, 2023)、2023年セ・パ公式戦入場者数 | NPB.jp 日本野球機構
<https://npb.jp/statistics/2023/attendance.html> (2023.10.9.5:18)

全国高等学校野球選手権では神奈川県代表の慶應義塾高校が1916（大正5）年第2回大会以来107年ぶりに優勝、「エンジョイベースボール」とよばれる野球の楽しさを具現化したスタイルとともに、場内を圧倒した応援ぶりが批判を含めて話題をよんだ。

1.2. 「みせる」要素の萌芽は明治時代に⁽³⁾

野球が発祥の地アメリカから日本に“輸入”されたのは1872（明治5）年である。お雇い外国人教師ホーレス・ウイルソンによって第一大学区第一番中学（現・東京大学）の生徒に伝えた事を嚆矢とする。当初野球は「する」楽しみであった。それが試合、といっても現行のような試合ではなくルールもまちまちな「遊び」となり、それをもの珍し気に眺める人々が現れた。やがて学校を揺り籠に「学校対抗」という試合の形式が生まれ、母校と相手校との試合に母校を「応援」する意識の向上、「みる」観衆の登場は自然な流れであった。

こうした野球の流れを輸入とほぼ同時期に誕生した新聞が報道し、普及を支えた。やがて大阪朝日新聞社により夏の甲子園の前身、全国中等学校野球優勝大会が1915（大正4）年に創設されて新聞による喧伝とともに全国に野球熱の高まりとなって全国に広がる。主たる目的である新聞部数の拡大とともに「みる」意識を育む大きなエポックとなった。観衆の急増に応えるべく阪神電鉄が当時「東洋一」と称された阪神甲子園球場を1924（大正13）年兵庫県西宮市に開場、「みせる」場としてのスタジアムが整備されて観衆を吸収していく。この年はまた愛知県名古屋市の本球場でライバル大阪毎日新聞社が通称「春のセンバツ」全国選抜中等学校野球大会第1回大会を開催。翌年から甲子園球場に開催の場を移し、野球熱はますます高まっていった。

翌1925年には早稲田、慶應義塾、明治、法政、立教そして東京帝国大学による東京六大学野球連盟が発足してリーグ戦を開催、加熱した応援合戦の末に1906年から19年もの長きにわたり中断していた早稲田と慶應による早慶戦もリーグ結成の条件として復活した。そしてこの年3月に日本初のラジオ局として開局したJOAK東京放送局（後のNHKラジオ第一放送）が11月に復活早慶戦を中継、27年には全国中等学校野球優勝大会を全国中継し野球人気は頂点を迎えるのである。

「みせる」野球としての最高の場であるプロ野球はこうした学校対抗の広がりを通して高まった野球熱の延長線上にある。そう解釈するのがこれまでの流れであり、「正史」とよばれてきたものに他ならない。現在のNPBが日本職業野球連盟として創設されたのは1936（昭和11）年。読売新聞社社長正力松太郎のよびかけに甲子園球場を保有する阪神電鉄など新聞、鉄道7社が結集し7球団によるリーグ戦が開始されて今日の繁栄につながる。

一方で職業野球連盟創設以前、1920（大正9）年、早稲田大学野球部出身の河野安通志、後述する押川春浪（本名・方存）の弟で早稲田大学野球部初代主将の押川清、橋戸頑鉄（本名・信）らによって日本初の職業野球球団「日本運動協会」が創設され、後続のマジシャン松旭齋天勝がオーナーとなって1921年に誕生した「天勝野球団」と興行を続けた。しかし、貸しグラウンドとしての財源であった芝浦球場が1923年9月11日に起きた関東大震災からの復興を理由に接収されて活動を停止。対戦相手を失った天勝野球団も解散の憂き目をたどって早すぎた日本初の職業野球球団は消滅した。

ここで注目しておきたいのはこの日本初の職業野球団、日本運動協会が「みせる」場としてのグラウンドを保有していた事である。「する」場としての貸し球場であっただけではなく観客席

(3) 広瀬謙三（1964）日本の野球史. 日本野球史刊行会

ベースボールマガジン（1994）日本プロ野球60年史. ベースボールマガジン社

菊幸一（1993）「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学. 不昧堂

坂上康博（2001）にっぽん野球の系譜学. 青弓社

を設けて興行する場、つまり「みせる」意識が育まれていたことである。芝浦球場では復活前の早慶前哨戦として両校OBチームによる試合が多く観衆を集めていたことを特筆しておきたい。中等学校野球そして日本運動協会を通して大正年間にはすでに「みせる」意識、「みせる」場が存在していたことの証明である。

1.3. 平岡熙という先駆者を再評価する

「みせる」意識、「みせる」場の提供は今日、野球とりわけプロ野球にとっては極めて重要な視点となっている。2023年3月、公式戦開幕と同時に札幌市から移転し隣接する北広島市に開場した北海道日本ハムの新本拠地スタジアム「エスコンフィールドHOKKAIDO」は周囲のボールパーク「北海道ボールパークFビレッジ」とともに「野球だけじゃない」場の提供を標榜、新たなファンを呼びこむ戦略を練り出して関心を集めている。「みせる」意識の進化系である。残念ながら計画途上の交通アクセス、低迷するチーム成績により「みせる」スタジアムの機能は十分稼働しているとは言い難いが、将来に向けた取り組みは大いに注目される。⁽⁴⁾

では、野球が輸入された明治の野球草創期に、「みる」から派生した「みせる」意識の萌芽はあったのか。

筆者は米国留学から帰国後、工部省技官として就業した新橋鉄道局内に1876（明治9）年に日本初の野球チーム「新橋アスレチック倶楽部」を組織し「保健場」と命名した観客席付きの専用グラウンドを保有した平岡熙を再評価し、その進取性から日本における「みせる」意識の起点となり、プロ野球創設への流れを生み出した存在と捉えている。平岡の進取性をあげると、いずれも今日のプロ野球につながる視点であることを理解されよう。⁽⁵⁾

1. 会費を徴収したクラブ組織の創設とその運営
2. ユニホームの着用
3. 野球用具とルールへの注目と輸入
4. 「保健場」と命名した専用グラウンドの所有（観客席あり）
5. 日本にも早晩プロフェッショナルが登場するとの“予言”

こうした平岡からの流れは「野球を楽しむ」という意味では三田ベースボール倶楽部を通して慶應義塾の「エンジョイベースボール」に結実し、一方でその後のクラブチームの勃興、さらに「天狗倶楽部」とよばれたスポーツ愛好家集団を通して「みせる場」としてのグラウンド整備、スタジアム建設、さらにプロ野球の創設へと流れていく。この天狗倶楽部は2019年、2020東京オリンピック開催を意識してNHKが大河ドラマで放送した「いだてん」でとりあげられて話題となったが、その存在は長くSF作家横田順彌の著作以外で知られることはなかった。とりわけスポーツ研究の分野では、天狗倶楽部を正面から取り上げた先行研究は少なくとも筆者が探した限り存在は確認できない。1911（明治44）年、東京朝日新聞社が青少年の風紀の乱れの要因として野球を断罪、綱紀を質すとして連載した「野球其害毒」を取りあげる際、害毒論を展開する東京朝日に対抗した存在として天狗倶楽部が記述されるに過ぎなかった。

(4) 朝日新聞、読売新聞、産経新聞

(5) 国民新聞運動部（2000）日本野球史. ミュージアム図書復刊本

大和球士（1976）改定新版 野球百年. 時事通信社

大和球士（1977）真説日本野球史 明治篇. ベースボールマガジン社

菊幸一：前掲書

佐野慎輔（2023）野球を「みる」「みせる」発想はどこに萌芽があるのかーその序として、平岡熙を再評価する. 「All About Baseball」スポーツナレッジ研究会編, 創文企画, p.57～p.72

平岡熙は野球史の「傍流」と扱われるが、天狗倶楽部もまた正史から外れた傍流以下の扱いでしかない。しかし両者は改めてその功績が問われるべきであり、とりわけ研究分野では扱いのない天狗倶楽部の野球史における位置を考え、プロ野球創設につながる流れ、「みせる」意識、「みせる」場の提供に果たしていった役割を論じていくものである。

2. 研究者が取り上げてこなかった天狗倶楽部の存在とその立ち位置

2.1. プロ野球研究はなぜ遅れたか？

プロ野球史研究の先駆的な存在であり綿密な資料検証でも知られる菊幸一『近代プロ・スポーツの歴史社会学』（1993年・不昧堂出版）では「イデオログ安部磯雄の野球信念と早稲田系イデオロギー」としての項目を設け、詳細な検討を加えているものの、天狗倶楽部自体には言及はなされていない。「この期における野球信条の中核を担う人物」として天狗倶楽部のリーダー押川春浪の言説を取りあげ、押川の唱える「純日本的武士道野球」については言及しているが、天狗倶楽部という文言は出てこない⁽⁶⁾。同様に坂上康博『にっぽん野球の系譜学』（2001年・青弓社）においても「武士道による野球の擁護」の項目を設け、SF冒険作家－押川春浪、早大教授－安部磯雄について考察を加えている。しかし天狗倶楽部そのものへの記載はない。⁽⁷⁾

この時期、前述の書籍に代表される優れた野球研究論文がまとめられているが、先行研究に天狗倶楽部を正面から取り上げた論文はなく、その名称すらみることができない。わずかに有山輝雄『甲子園野球と日本人』（1997年・吉川弘文館）が「野球害毒論争」の論争の発端として天狗倶楽部の名称を以下の通りに著述しているに過ぎない。⁽⁸⁾

（前略）…「東京朝日新聞」が、一九一一年八月二〇日から「野球界の諸問題」、次いで八月二九日から「野球と其害毒」と題する連載記事を二二回も掲載し、野球そのもの、あるいは野球界の弊害を批判するキャンペーンを展開したことが論争のきっかけである。これに対し、私立学校卒業生を中心とする野球クラブであった天狗倶楽部などが猛反発し、反論を展開した。それに「読売新聞」などが同調し野球の弁護論を唱え、野球問題演説会を開催するなど論争となったのである。…（後略）

ひとまず天狗倶楽部は置いておくとして、菊が重い扉を開くまで日本では長らくプロフェッショナル・スポーツ、プロ野球は体育学の研究対象とはならなかった。スポーツは明治期に西洋から“輸入”され、「お雇い外国人教師」らによって学校あるいは軍隊を受け皿、揺り籠として生育していった。同時に明治政府が富国強兵策を掲げて挙国化を急いだ時期にあたり、若者の心身を鍛錬することが教育の眼目となった。体を鍛え、精神の修養を図り、規律正しい集団行動をとる教育に力がそそがれ、教育と相まった「体育」としての生育は結果としてスポーツが本来的に保有している「楽しさ」あるいは「愉快」と言った性質を消したといえば語弊はあるが、隠したと言ってもよい。「する」「みる」楽しさよりも体を鍛え、精神の修養を図る流れの中で、スポーツは変容し金銭がからむプロ・スポーツは一段格下のものとして認識されてきた背景である。それを許してきたのが「高み」からみる研究者であり、「アマチュア・スポーツ至上」を標榜したメディアではなかったか。

(6) 菊幸一：前掲書p.104～p.111

(7) 坂上康博：前掲書p.109～p.122

(8) 有山輝雄（1997）甲子園野球と日本人. 吉川弘文館、p.47～p.67

菊は2020年、日本体育・スポーツ経営学会第42回大会の基調講演で「私の博士取得学位請求論文が、実はプロ・スポーツの研究であり「おそらくプロ・スポーツを対象にした研究で学位を取ったのは当時（今ではわかりませんが）初めてだったのではないかと思います」と述べるとともに「プロ・スポーツを学的対象とすることの困難」さを説いている。⁽⁹⁾

菊はプロ・スポーツを取りあげることに偏見があり、研究レベルでタブー視されていた理由として「スポーツの見方自体にイデオロギー性があり」「アマチュアこそ文化なんだ」という信じ込みがあったのではないかと述べている。そうした観点から類推するに、平岡熙も天狗倶楽部も正史から外れた存在であり、取り上げる必要性も痛痒も感じなかったとすることができる。ようやく八木一弥が『明治期における日本野球文化構築に関する一考察』（2023年・立教大学コミュニティ福祉学研究紀要第21号）で「野球害毒論争」を取り上げてメディアにおける記事を網羅的に調べて考察を加え、天狗倶楽部の果たした役割に着目している。日本における野球文化構築過程を考える意欲的な論文である⁽¹⁰⁾。もっとも、この論文では「野球害毒論争」に焦点が絞られており、筆者の考える通史としてのプロ野球誕生に存在する天狗倶楽部の立ち位置への考察とは明らかに視点が異なっている。

2.2. 天狗倶楽部創設のころ

そもそも天狗倶楽部とはどのような集団であったのか。SF冒険作家・押川春浪への興味から天狗倶楽部に関心を持ち、研究を深めていったSF作家・横田順彌の著作等を参考に論を進めていく。⁽¹¹⁾

明治42年というから西暦に直すと1909年である。天狗倶楽部はこの年5月、忽然と“出現”した。準備を整え、誰かが音頭取りしてつくられた団体ではない。偶発的に生まれた「社交クラブ」と言い換えてもいい。前年の1908年1月に創設された早稲田大学系のスポーツ総合誌『運動世界』（明治43年1月号）に押川春浪が自ら書いている。

天狗倶楽部の成立かい、先ず神変不可思議さね。知っての通り、いつ成立てそれがどう云う事になるなどの筋立った話はない。…(中略)…だが先づ少くともそのきっかけと云う奴はあるよ、つまり羽田の運動場が出来たので中沢君や其他の連中と一日を豪快に健全に遊ぼうと云う…(後略)

この年、羽田に運動場がつくられたからそこで「遊ぼう」と集まった集団だという。羽田運動場といえば1911年11月、嘉納治五郎が創設した大日本体育協会（日本体育協会を経て、現・日本スポーツ協会）が主催し、翌1912年の第5回ストックホルム・オリンピック競技大会に初の日本選手を派遣するべく、陸上競技の予選会を開いた会場である。京浜電気鉄道が保有する「約六万坪」の社有地に「一万坪の大運動場」が造営された。当初は野球場とテニスコート、器械体操場とクラブハウスのみだったが、その後400mトラックを持つ陸上競技場が新設されてこの競技場で予選会が開かれたのである。野球場と陸上競技場にはそれまで早稲田大学の戸塚球場や慶應

(9) 菊幸一（2020）豊かな生活とスポーツの成長産業化を読み解く. 体育・スポーツ経営学研究、☆33：21-24

(10) 八木一弥（2023）明治期における日本野球文化構築に関する一考察. コミュニティ福祉学研究紀要、☆21：29-40

(11) 横田順彌・會津信吾（1987）日本SFの祖 快男児押川春浪. パンリサーチ出版局

横田順彌（1991）熱血児押川春浪-野球害毒論と新渡戸稲造. 三一書房

横田順彌（2019）「天狗倶楽部」怪傑伝. 朝日新聞出版

横田順彌（2019）快絶社遊 [天狗倶楽部] 明治バンカラ交友録. ハヤカワ文庫

義塾大学の三田綱町球場にしか存在しなかった観客席が設けられ、その後の関西を中心とした電鉄会社による阪神甲子園球場などスタジアム造営（表1）の嚆矢となった。⁽¹²⁾

ちなみにこの総合運動場は複数のスポーツが同時に開催可能であり、かつ愛好者に貸し出して「学校団体及び個人の利便に供する」施設でもあった。観客席の常設と学校、団体、個人への貸し出しはまさに先人平岡熙の「保健場」に通ずる発想である。こうした構想をまとめたのが押川春狼であり、押川の書く「中沢君」こと京浜電鉄技師長でもあった中沢臨川（本名・重雄）に他ならない。中沢は文学者としても知られた存在で、押川とはスポーツではなく文学を通してつきあいはじめ、その後、天狗倶楽部のNO.2的な存在となっていく。ふたりは総合運動場の構想を語り、1908年4月発行の『運動世界』には羽田運動場設計構想に関わる記事が掲載された。その後、京浜電鉄による造営計画が発表されて、ふたりは創立委員会にその名を連ねて造営の中心となっていった。⁽¹³⁾

表1 職業野球開始までの主要グラウンド⁽¹⁴⁾

完成年	グラウンド名（創設組織）	現在の所在地
1882年	保健場（新橋アスレチック倶楽部）	東京都港区
1902年	戸塚球場（早稲田大学）	東京都新宿区
1903年	三田綱町球場（慶應義塾大学）	東京都港区
1909年	羽田運動場（京成電鉄）	東京都大田区
1910年	明治大学球場（明治大学）	東京都杉並区
1910年	香露園グラウンド（阪神電鉄）	兵庫県西宮市
1910年	米子中学校球場（鳥取県立米子中学）	鳥取県米子市
1913年	豊中グラウンド（箕面有馬電軌）	大阪府豊中市
1913年	奈良春日野球場（奈良県）	奈良県奈良市
1915年	横浜公園平和野球場（横浜市）	神奈川県横浜市中区
1916年	鳴尾球場（阪神電鉄）	兵庫県西宮市
1921年	芝浦球場（日本運動協会）	東京都港区
1922年	宝塚球場（阪急電鉄）	兵庫県宝塚市
1922年	京阪グラウンド（京阪電鉄）	大阪府寝屋川市
1924年	阪神甲子園球場（阪神電鉄）	兵庫県西宮市
1924年	春日原球場（九州鉄道）	福岡県春日市
1926年	明治神宮野球場（明治神宮奉賛会）	東京都新宿区
1927年	鳴海球場（愛知電鉄）	愛知県名古屋市緑区
1928年	藤井寺球場（大阪電鉄）	大阪府藤井寺市
1930年	県営草薙球場（静岡県）	静岡県静岡市駿河区
1932年	旭川市営球場（旭川市）	北海道旭川市
1932年	西京極球場（京都市）	京都府京都市右京区
1934年	円山球場（札幌市）	北海道札幌市中央区
1934年	大宮公園野球場（埼玉県）	埼玉県さいたま市大宮区
〈1936年日本職業野球連盟創設〉		
1936年	上井草球場（西武鉄道）	東京都杉並区
1936年	洲崎球場（大東京軍）	東京都江東区
1937年	西宮球場（阪急電鉄）	兵庫県西宮市
1937年	後樂園球場（後樂園スタジアム）	東京都文京区

(12) 馬場信行（2019）明治後期以降の京浜電気鉄道開設の羽田運動場に関する設置基本構想および整備、運動内容の分析.公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集、54：367-374

(13) 横田順彌・會津信吾：前掲書
馬場信行：前掲論文

(14) 沢柳政義（1951）野球場建設の研究.野球場建設の研究刊行会
沢柳政義（1990）野球場大事典.大空社
ベースボール・マガジン編（2001）野球場.ベースボール・マガジン社

羽田運動場開場とほぼ同時期に押川と中沢が中心となって「国民にスポーツ意識を目覚めさせる」目的の「日本運動倶楽部」が創設されている。「憲政の神様」として政治史にその名が残る当時の東京市長、愕堂こと尾崎行雄を会長に副会長に法学博士の和田垣謙三、安部磯雄を理事として結成、羽田運動場に本拠を置いた。その日本運動倶楽部が京浜電鉄から運営権を譲り受けて羽田運動場の管理、運営にあたり各種運動会、競技会を主催、後援している。先のストックホルム大会出場の前選会にも大日本体育協会と主催に名を連ね、審判員を派遣、審判員だった天狗倶楽部会員の三島彌彦が飛び入り参加して好成績を収め短距離の代表選手となったのは草創期の混乱ぶりを物語る逸話といえよう。

ちなみに日本運動倶楽部の実務を担ったのは押川と中沢に加え、早稲田大学庭球部OBの劇作家で新聞記者の水谷竹紫や同じく早稲田出身の新聞記者・田村三治と慶應義塾大学野球部OBで後に衆議院議員となる鷲澤與四二である。5人は天狗倶楽部会員にその名が残り、安部は会員ではなかったものの理論的支柱として天狗倶楽部メンバーの尊敬の対象であった。また会長の尾崎は1915（大正4）年に天狗倶楽部に入会している。ただ58歳とメンバーの中では目立って高齢であり活動らしい活動はしていない。横田は「尾崎の次男で、黎明期の飛行家（パイロット）であり後の参議院議員・尾崎行輝が〔天狗倶楽部に〕入会したので」ときおり宴会等に顔を出した程度だと『「天狗倶楽部」怪傑伝』（2019年・朝日新聞出版）に記している。

日本運動倶楽部はその後、1911年に創設された大日本体育協会が浸透していくにつれて役割を果たしたかのようにスポーツの歴史から姿を消している。では天狗倶楽部が代わって「国民にスポーツの意識を目覚めさせる」役割を担ったのかということそうではない。あくまでも自分たちのスポーツを楽しむ親睦組織としての存在であったに過ぎない。横田は「派生的に誕生した」ものだと説き、日本運動倶楽部と表裏をなすものと位置付けた⁽¹⁵⁾。筆者もこの横田説に与するものである。

2.3 社交型のスポーツクラブを目指して…

押川春浪は天狗倶楽部命名の由来をチームとしては初の対外試合となった「やまと新聞」戦の大勝を述懐しつつ、前述の『運動世界』にこう記した。

其初めやまとチームとやった頃は都下の新聞でも文士チーム対云々と書いて御座ったが、或日の万朝に天狗チームと書いてある、巧い巧い天狗チームとは善う出来た、但し我党の士は向う所敵なし正に天軍チームだ。爾來天軍チームと称すべしと極めて居たが、世間様では矢張り天狗チームの方が口調がいい、と見へて天狗天狗と云つてくれる、いつの間にやら天狗チームとなつて了つた……（後略）

そして「チーム」としての志向、目的を続けて以下のように述べている。

此互に室内で運動の足らぬ仕事をやつて居る向の者には、気分迄が萎け込んで娯楽と云つても余り健全な事は考へ付かない、そこへ戶外の爽快な空気に触れて、肉体の凛々しい活動を試みるのぢやないか、飯も頗る巧いし、気も心も非常に爽かで活動の力が倍にも三倍にもなる……（中略）……心身転換法としても天狗倶楽部の如きものの存在は、我々実務に従事して若年寄には是非とも必要を見得べきぢやないか。

(15) 横田順彌・會津信吾：前掲書
横田順彌：「天狗倶楽部」怪傑伝

それから今一つは天狗倶楽部が心身の衛生機関と云ふ計ぢやなく、一個の社交倶楽部として存在の意義を繋ぎたい。趣味に集る団結…最も健全なる趣味に結合する団体、幅に於ては諸種の人物の連合、縦に於ては先輩後輩の連絡、少くともかゝる社交団の存在は必要で又頗る有益である……（中略）……其意味を拡張し発展して大にやる事が又我輩の本懐である……（後略）

天狗倶楽部では野球もやつた、角力もやつた、まだまだ将来は柔道もやれば、演説もやる、男子のやるべき事なら何でもやる……（後略）

押川の言を借りれば天狗倶楽部は「一個の社交倶楽部」であり「健全なる趣味に結合する団体」としてさまざまなスポーツに親しんだ一団である。言い換えれば現在に続く欧米型のスポーツクラブの萌芽と言ってもよい。⁽¹⁶⁾

学校体育、軍隊における体力づくりを揺り籠とした日本ではついでスポーツを核にした「社交型クラブ」は育たなかった。今日、この国でスポーツのクラブといえば中学校や高校の運動部活動を指し、何かひとつの競技スポーツを実践し試合をする単位を称することが通例である。いわば目的達成、目的遂行型の集団であり、スポーツクラブと称するスポーツジムもまた健康、身体づくりを目的とした人たちの集まりに他ならない。

こうした「クラブ」あるいは「倶楽部」という名称はすでに明治期に存在していた。その嚆矢となるのは平岡熙が新橋鉄道局で設けた新橋倶楽部であり、さらに1880（明治13）年、新橋アスレチック倶楽部に対抗するべく徳川御三卿田安家当主の伯爵徳川達孝が自邸のある三田綱町を本拠に発足した徳川ヘラクレス倶楽部が続いた。これらはしかし野球を楽しむ集団ではあったが、勝つこと技量の向上のみを目指した目的達成型の集まりではない。

御三卿清水家付家老の家格に生まれた平岡がアスレチック倶楽部を創設した当時、平岡家は田安家に仕えており、洋行帰りの熙は徳川伯爵家に英語を教えに通った。その傍ら手ほどきしたのがベースボールである。この米国生まれの遊戯はたちまち達孝をとりこにし、剛毅な伯爵は自邸の広大な庭園を野球場に造り変えている。国民新聞運動部編『日本野球史』はその状況をこう描写している。「勿論達孝伯も時代に先駆せんとする考えはあったのであろう。広い庭園は忽ち築山を壊し泉水を埋め、小山の林を切って地は均された。広さ数千坪、見渡す一面の平地に若人の勇ましき姿は毎日見えた」⁽¹⁷⁾

本来スポーツおよびスポーツクラブは英国のジェントリーと言われる富裕層から生まれ育ったものである。以下は余談のことながらヘラクレス倶楽部は落語の「寝床」ではないが新橋アスレチック倶楽部と同じく富裕層の道楽的な側面を有していたところを記す。

徳川達孝を中心に肥前鍋島藩12代当主の鍋島直映侯爵、生田益丈、市川延次郎ら駒場農学校（農科大学を経て東京帝国大学、現・東京大学農学部）チームを結成するメンバーが毎日見えた「若人」であり、真っ赤と清々しいグリーンのユニホームを着用し赤組と青組に分かれて試合するさまを『日本野球史』は「紅青相乱れて試合する様は一幅の画図であった」と評している。白いユニホームのアスレチック倶楽部とは月に一度の新橋-三田定期戦をもち、たびたび白熱した試合となったが見物人は極めて少なく張り合いがなかったことから「見物に茶菓を饗する」と宣

(16) 横田順彌・會津信吾：前掲書

(17) 国民新聞運動部：前掲書. 最初のユニフォームとマスク、徳川一門のヘラクレス倶楽部.p 9～p.12
小野田滋（2018）鉄道人物伝NO.14「野球を広めた鉄道技術者 平岡熙」. 鉄道総合研究所刊RRR2018年5月号34-35P
大澤輝嘉（2008）徳川庭園と本邦二番目の野球チーム. 三田評論第25回、2008年6月号

伝して人を集め、7回の攻防が終わると餅菓子や煎餅を配ったこともあった。この7回裏終了後に茶菓を饗したところに平岡熙が紹介したベースボールの影響をみてとれる。現在でもMLBの試合では7回裏が終わると「セブンス・イニング・ストレッチ」と称してスタンドの観客が立ち上がり「Take Me Out to the Ball Game（私を野球につれて）」が歌われる。

平岡の影響はユニホームだけではなく用具へのこだわりにもみられ、とりわけベースはキャンバス地の布を表面に中におがくずを詰めて製作、平岡の口述をもとに何度も造り変えて米国製と遜色のないものを造りあげた。さすがに徳川達孝が「軽くて美しい」と柾目の通った桐の木で作らせたバットはすぐに折れて使い物にはならなかった。また平岡から米国では試合で入場料を取っていると聞くと達孝は「では日本でも早くそうしたい。日本人が入場料を払わぬなら、一つアメリカに行ってやってはどうだろう」と話している。⁽¹⁸⁾

2.4. 「みせる」意識の継承、クラブとしての在り方は

人に「みせたい」「みてもらいたい」意識はあきらかに明治期のアスレチックやヘラクレスに始まる。プロフェッショナル・スポーツに通じる発想となるが、その後のできたクラブあるいは同好会は「する」「楽しむ」意識はあっても、どこまで「みせる」を意識していたかは疑問符がつく。1880年代になると72（明治5）年に発せられた学制も整いはじめ、各地に高等教育機関が置かれスポーツを筆頭に学校対抗戦が始まっている。野球においては対校意識の高まりに加えて日本的な精神野球が台頭していく時期にあたった。

1882（明治15）年頃にできた駒場農学校チームを皮切りに83年工部大学（東京帝国大学を経て現・東京大学工学部）ベースボール会、84年慶應義塾クラブ（88年から三田ベースボール倶楽部）、85年白金クラブ（現・明治学院大学の前身、波羅大学同好会）、青山英語学校（現・青山学院大学）同好会、東京法学校（東京帝国大学を経て現・東京大学法学部）ベースボールクラブ、溜池クラブ（87年ごろに赤坂クラブと東京クラブに分派）、88年第一高等中学校（後に旧制第一高等学校を経て、現・東京大学教養部）ベースボール会（※工部大学と東京法学校ベースボールクラブが連合）、89年東京高等商業学校（後に東京商科大学を経て一橋大学）チームなどの野球を愛好する“クラブチーム”が陸続と誕生している⁽¹⁹⁾。溜池クラブを除けば学校の名を冠しているものの、当初は学校という公的な組織とは無関係に結成された自主的な集団であり、野球に興味を同じくする者たちが自然に集まってできたクラブである。それが学校組織のなかに組み込まれていくことによって単純に「野球を楽しむ」同好の士の集まりという本来のクラブ、同好会としての性格は消滅、学校対抗戦の様相をより強くしていったことは否定できない。

その頃までには、さすがに「襦袢下かシャツ一枚、ひどいのは暑い折は素裸体に六尺禪一本、朴菌の下駄という珍な格好」「寒い折は羽織袴」は姿を消しつつあったものの、ある日の工部大学の選手は「白のユニホームと云いたい泥に塗れ垢染みたところ、鼠色であり茶褐色である」ユニホーム姿であった。一方この時、アスレチック倶楽部の「保健場」で相対した立教学校（現・立教大学）セントポールクラブの選手は「純白、赤字の縫い取りのあるマークが美しく照り映えている」ユニホーム姿。精神的な野球に傾注していく学校とハイカラなクラブを目指した学校とに分かれていく時期にもあたった。ハイカラなユニホームは自らを装うことで「みせる」以前の「みられる」ことを意識したスタイルであったと考えてよい。⁽²⁰⁾

1909年に出現した天狗倶楽部は遅れてきたクラブだが、あきらかにアスレチック、ヘラクレス

(18) 国民新聞運動部：前掲書・最初のユニフォームとマスク、徳川一門のヘラクレス倶楽部.p9～12

菊幸一：前掲書p.76～p.84

(19) 菊幸一：前掲書p.76～p.84

(20) 横田順彌・會津信吾：前掲書

両倶楽部の流れを引く「社交型クラブ」である。試合時には胸に「TNG (Tengu)」のロゴを縫い付けた白のユニホームを着用し颯爽とプレーした。学校の枠に留まらないから対抗意識はなく、勝っても負けても野球を楽しみ「試合が済んでから休憩所で鯛を下物に冷酒の大酒宴…(中略)…余興まであって、滅茶苦茶に怒鳴った末引き揚げました」という『武侠世界』(大正三年十月号)の記述を引用しながら横田順彌はこう書いている。

「ゲーム中に、飲酒するのではないから、野球を冒瀆しているわけではない。また、上戸たちにとって、スポーツを快い汗を流した後のアルコールが、いかにうまいものであるかはいまでもない」「だが、自らもアルコールは一滴も口にせず、野球部員の飲酒を一切認めず、違反者は即退部を命じ、決して復部を認めなかった早稲田大学野球部部长・安部磯雄などとは、このあたりでスポーツに対する考えが微妙に異なっていた」

彼らは京浜電鉄の羽田運動場を本拠とし野球以外にもテニスや柔道、相撲などに親しみ、ときには見物人に応援の方法までを教えてスポーツを楽しんだ。さらに東京朝日新聞のキャンペーン「野球其害毒」に敢然と異を唱え、言論によって言論機関に対抗するというまさに異色の倶楽部であった。その名称は昭和初期まで残っていたが活動の最盛期は明治末期から大正初期であり、リーダーであった1914(大正3)年11月の押川春浪の死去後ほとんど動静は伝わっていない。この倶楽部のありようが継承されていたならば、日本におけるクラブの在り方は大きく変わっていたのではあるまいか。⁽²¹⁾ 今後の研究テーマとなる。

また、羽田運動場も1917(大正6)年の高潮で被害をこうむり、以後も使用されたものの本来の機能を失い、1938年羽田空港拡張と共に姿を消した。⁽²²⁾

3. 天狗倶楽部が残したもの

3.1. ゆるやかな連帯⁽²³⁾

天狗倶楽部は目的遂行型の集団ではなかったと前述した。ゆるやかな連帯の倶楽部であった。作家の横田順彌は押川春浪とならぶ天狗倶楽部の中心的存在であった中沢臨川が『武侠世界』(大正三年十月号)に書いた文章「大賢小賢」を引用し會津信吾との共著『快男児押川春浪』(1987年・パンリサーチ出版局)に天狗倶楽部を「極めて自由主義的な、悪くいえば、つかみどころのない集団だった」と記している。その部分を孫引きする。(略は筆者)

△天狗倶楽部は…(中略)…発会式なし、誓盟式なし。人事の逢遇気運のうち此の如く自然なるは稀れと言うべし…(後略)

△天狗倶楽部の名の出所、名付け親……それも余は記憶せず。恐らく一場の座談より弘ろまりしものか。

△天狗倶楽部に会員名簿なし。出入自在なり。来る者にして會て拒みしことなし、去りし者にして會て追ひしことなし、また怨みしことも嘲りしこともなし…(後略)

△規約し、調停し、強制して尚且つ保ち能はざる会あり。わが天狗倶楽部は自然に放任して少しも衰へず。その間おのづから節制あり徳義あり…(後略)

△天狗倶楽部は運動の会にあらず、また酒仙の会にあらず。ただ運動家をも酒仙をも拒まざ

(21) 横田順彌・會津信吾：前掲書

(22) 京浜急行電鉄編(2008)京急グループ110年史 最近の10年.京浜急行電鉄

(23) 横田順彌・會津信吾：前掲書

横田順彌：「快男児押川春浪」

りしのみ。老書生をも美少年をも拒まざりしのみ。言葉に現はしうるが如き囚はれたる目的あることなし…(後略)

△宣言や趣意書や我に要なし。法千章、規則万条、われ等の為には徒爾のみ。

△法を議せんとしたることあり。会費を徴集すべく動議したることあり。遂に今日まで成立せざりき…(後略)

△我等は未だ嘗て天狗倶楽部の未来を気にしたることなし。

△天狗倶楽部には會て会長も幹事も置きたることなし。未だ一人も会長を希ひし者なし。未だ一人も無名の幹事たることを辞したる者なし。好個の共産団体なり。

以下略

発会式もなければ加盟宣誓の儀式もない。会員名簿はなく出入りは自由、来る者は拒まず去る者は追わず、放任主義だが各自が節制しており宣言や趣意書、規則で縛ることはない。会費も徴収せず、会長も幹事も置かない。運動だけを志向する集まりでも酒宴だけを楽しみにする集団でもない。つまり「ゆるやかな連帯」と「自己責任」で成り立っているクラブだと中沢は説いた。つまり多様な志向をもった多彩の集団だといえようか。

『武侠世界』大正3年11月号および大正4年4月号に名簿が掲載され、総勢100名を超える会員の名がある。その主だったメンバーを記すだけでも多彩な集団だと理解できよう。

《作家・画家・文化人》

中沢臨川（文芸評論家、京浜電鉄技師長）、小杉未醒（洋画家）、倉田白羊（洋画家）

柳川春葉（小説家）、高杉滝蔵（早稲田大学教授）、児玉花外（詩人、明治大学校歌作詩）

水谷竹紫（劇作家、早稲田大学庭球部出身）、河岡朝風（作家）

《言論人＝雑誌、新聞記者》

押川春浪（武侠世界主筆）、阿武天風（冒険世界主筆）、田村三治（中央新聞記者）

弓館小鰐（万朝報-東京日日新聞記者）、針重敬喜（武侠世界編集主任、早稲田大学庭球部出身）、吉岡信敬（読売新聞記者、早慶戦中止の原因のひとつとなった応援団長）

西尾守一（早稲田大学野球部出身、大阪毎日新聞記者）

《野球選手》

橋戸頑鉄（早稲田大学野球部出身、万朝報-大阪朝日新聞-東京日日新聞記者）

押川清（早稲田大学野球部出身、初代主将、春狼の弟）

河野安通志（早稲田大学野球部出身、後に日本運動協会創設、名古屋軍総監督）

飛田穂洲（早稲田大学野球部出身、初代監督、報知-読売新聞記者、運動界編集長）

三神吾郎（早稲田大学野球部出身、米独立リーグオール・ネーションズで「ジャップ・ミカド」としてプレー）、獅子内謹一郎（早稲田大学野球部出身、京浜電鉄社員、岩手野球の父）、泉谷祐勝（早稲田大学野球部出身、のち宮内省勤務、皇室に野球部創設）

平岡寅之助（東京高等商業チーム、新橋アスレチック倶楽部・平岡熙の弟）

《スポーツ選手》

三島彌彦（日本初のオリンピック代表=1912ストックホルム陸上短距離、学習院-東大野球部）、大村一蔵（学生相撲興隆に貢献）、玉椿憲太郎（大相撲・関脇）

前田光世（柔道5段、武道家、アマゾン開拓に尽力、別名コンデ・コマ）

佐竹信四郎（柔道5段、メキシコで柔道指導）、大谷光明（浄土真宗本願寺派第21世大谷光尊の三男、ゴルフ草創期の普及に貢献）、春日弘（日本陸上競技連盟第2代会長）

三神八四郎（早稲田大学庭球部出身、日本に硬式テニス導入）

《政治家》

尾崎行雄（東京市長、衆議院議員、司法大臣、文部大臣）、尾崎行輝（参議院議員）
 鷲澤與四二（慶應義塾大学野球部出身、時事新報北京特派員、衆議院議員）

野球選手ばかりではない。オリンピック選手もいれば、大相撲の関脇もいる。柔道家やテニス選手。そして作家や画家、新聞記者に政治家まで多士済々の集団はスポーツの楽しさで結ばれていた。彼らはその一方で「みる」「みせる」ことの意義も十分に理解していた。前述した「みられる」ことも意識したユニホーム、見物人に向けた応援指導など行動に現れていた。そうした状況に冷や水をかけたのが東京朝日新聞による野球批判である。“前哨戦”の「野球界の諸問題」という記事に続いて東京朝日新聞は1911（明治44）年8月29日から「野球其害毒」キャンペーンを始める。連日続く挑発的な野球批判に対し、「野球を愛する」集団が反論にたちあがる。緩やかな連帯が唯一、強く団結した行動であった。

3.2. 「野球其害毒」論争の要因とその結果

「野球其害毒」論争については数多くの先行研究が存在し考察を加えており、拙稿が「みる」「みせる」意識の継承を論じる観点から言及は最小限にとどめる。一方で「みせる」ことにこだわり、「害毒」論争に移行していく経緯を抑えておきたい。

発端となったのは東京朝日新聞1910年11月25日付の記事である。(X) という署名で「●（注：ママ）野球の興行化 学校広告の余弊 芸人に似た選手」との見出しを掲げ、一高野球は「神聖な球技」だが、慶應義塾、早稲田は学校の広告に利用して今日の興行化をなした原因と批判。早稲田のユニホームについて投手の河野安通志の名をあげて「海老茶に大きくWと黄色に編出したジャケットを着て」「青年学生の幼い虚栄心を煽り立てた」と書き、慶應については「靴底釘付の運動靴に紅白段駄羅の靴下を穿き帽子を横阿弥陀に猩々緋のオヴァーを羽織つて、牛の児のやうにゴムをモガモガ囁む姿」は「玉乗に甚だよく似て居る」と切り捨てた。また「両大学が負けず劣らず外国大学チームや商売人を招待し、木戸銭を取って見物させた事が著るしく選手の精神を墮落せしめた」と入場料徴収を非難した。

東京朝日新聞は同月27、28日にも同様の趣旨で早慶両校を批判した。翌11年にはいると2月に慶應の野球部選手を「亀さん」と称してその素行を取りあげ、5月には早稲田が米艦ニューオリンズ号チームと行った親善試合での入場料徴収を問題視。8月にはいると22日から24日にかけて「野球界の諸問題」と題した記事を4回にわたって掲載した。「諸問題」では入場料徴収がけしからんと説き起こし、学校が野球を宣伝広告に使うと論難。23日は私立大学の選手利用、さらに羽田運動場を造った京浜電鉄も選手を利用しているが、その点一高と学習院は立派だ論じた。23日は天狗倶楽部を名指しし選手の虚栄心を煽るものだと指弾。そして24日には早慶両校の選手たちの素行は日本の恥さらしだとまで書いた。

これらについて押川春浪はじめ天狗倶楽部が反論を展開し、いよいよ8月29日からのキャンペーン「野球其害毒」に移っていく。⁽²⁴⁾

害毒論争に移る前にユニホーム、入場料問題と大きく関わる事案について論じたい。話は1905（明治38）年早稲田大学野球部初の米国遠征に遡る。1901年、他校に遅れて創部した早稲田大学野球部を率いる野球部長安部磯雄は部員の意気を高めるべく「諸君が日本野球界の覇権を握るよ

(24) 横田順彌：「快男児押川春浪」

菊幸一：前掲書p.100～p.122

坂上康博：前掲書p.109～p.168

有山輝雄：前掲書p.42～p.67

うになれば米国遠征に連れて行く」と明言。1904年に学習院、一高、慶應義塾に横浜外国人クラブを撃破し完全優勝を飾ったことから翌年の遠征実現に至る。⁽²⁵⁾

遠征費用を概算すると5000円（当時の物価と現代の物価を比較すると約1490倍、つまり1円は1490円の価値とされる。ただ教員初任給が1901年8～9円に対し、いまは約20万円とすると1円の価値は2万円と考えられる⁽²⁶⁾）となり、安部は米国遠征中の試合での入場料収入で賄う計画をたてた。しかし総長大隈重信の英断により大学が拠出し、安部は難事を避ける事ができたが、キリスト教社会主義者として知られた学者が早くから入場料徴取に着眼していたことに注目したい。日本における初の入場料の徴取は1907年、慶應がハワイのセミプロ野球団セントルイスを招いて開催した親善試合だが、安部はそれ以前すでに入場料の活用に言及していた。

さて日本の野球チームとしては初の米国遠征は45日間で26試合を行い7勝19敗と決して芳しい成績ではなかったものの早稲田大学と日本野球界に「日本野球発達史上特筆大書きせねばならない」大きな収穫をもたらした。ワインドアップはそれまでソフトボールのように下から投げていた投法を華麗に変え、ボールスピードが増した。投手の河野はチェンジアップを覚えている。二塁牽制やスライディング、バント戦法やスクイズは日本球界になかったものであり、試合前のウォーミングアップはいきなりプレイボールとなる後進性を変えた。さらにグラブやスパイクなどの用具も持ち帰るなど確かに「革命的」だった。

彼らは大リーグの試合こそ観戦できなかったものの、西海岸のA級パシフィックコースト・リーグのロサンゼルス・エンゼルスとタコマ・タイガースとの試合を観戦、米国のプロフェッショナル・ベースボールに初めて触れた。マイナーリーグのチームでさえ専用球場を所有し、かつ本拠地を置く都市をフランチャイズとして興行権を独占、入場料の徴取などを通し職業として成り立たせている現実を直視した。この観戦は河野を中心に橋戸や押川清らがその後、日本初の職業野球チーム日本運動協会を創設する重要なマイルストーンとなった。⁽²⁷⁾

米国では選手たちが華麗なユニホームを着用、観客にアピールしていた。帰国後、早稲田のユニホームに胸文字が入り、シカゴ大学ゆかりの海老茶をスクールカラーとしたのはこの第1回米国遠征の影響である。

安部はこの米国遠征に際し、東京朝日新聞に手記「早稲田大学野球部選手渡米記」を寄稿している。東京朝日は野球に理解のある新聞としてこれを掲載した。ところが手のひら返しのような野球批判の背景には何があったのか。

1906年にその起点がある。1903年に始まった早慶戦は両校がかつての覇者一高を相次いで打ち破り、野球界の頂点に立ったことも手伝って毎試合大変な熱気を帯びた。1906年は両校譲らず3回戦にもつれ込み応援合戦はエスカレート、ついに第3戦は中止された。復活は1925年まで待たねばならなかったが、野球人気はますます興隆していった。ただそうした風潮に乗じて行儀の悪い選手たちも出現、学業を放棄する者も現れて顰蹙をかうようになっていく。東京朝日の批判はそうした社会情勢をうけた形だが、実は社内向けのアピールであったとの見方もある。一連の記事を主導したのは社会部長渋谷玄耳で若い美土路昌一（戦後、朝日新聞社長）、名倉聞一（後に社会部長）記者が執筆にあたった。ふたりはともに早稲田大学文学部出身で野球には疎かったと

(25) 早稲田大学野球部稲門倶楽部編（2010）白球の絆－稲門倶楽部の100年．早稲田大学野球部稲門倶楽部
菊幸一：前掲書p.100～p.122

(26) 吉野裕一（2023）昔の「1円」は今のいくら？明治・大正・昭和・現在、貨幣価値（お金の価値）の推移．三菱UFJ信託銀行
<https://magazine.tr.mufg.jp/90326>（2023.10.10.7:30）

(27) 早稲田大学野球部稲門倶楽部編：前掲書
菊幸一：前掲書p.100～p.122

いう。これまでの路線から独自路線を打ちだそうと考えた洪川が2人を指揮し、「野球亡国論」の先頭に立ったというのである。また大阪でライバル関係にある大阪毎日新聞が東京日日新聞を買収、東京進出を果たした事に対する刺激的な記事による営業策だったとも言われる。⁽²⁸⁾

1911年8月29日、東京朝日は「野球其害毒」の連載を開始。第1回は一高校長新渡戸稲造が登場し「野球は巾着切りの遊戯」「野球選手は不作法」で「本場米国でも弊害」がおきており「父兄は嘆いている」と断じた。以後、東京府立第一中学や静岡中学など各地中学校校長や学習院院長乃木希典ら教育界の名士が「野球の弊害」を訴えた。地方の中学ではこのキャンペーンの影響から「野球禁止令」がされたところもあったが、記事には首をかしげるような内容、事実誤認も少なくなくインタビューの改竄も随所にみられた。

押川春浪ら天狗倶楽部の会員は読売新聞や東京日日新聞に陣取って激しく反論、後の新聞戦争につながる論争に発展していく。なかでも河野安通志は東京朝日のインタビューを受け、その内容が9月5日の連載で「旧選手の懺悔」の見出しにより「私も早稲田なぞへ入らずに高等商業へでも入つたらば、と時々思わぬでもない」と述べ、さらに「三十八年の渡米から帰つた時浅い考えから妙な服装をして其風が日本全国に伝播するに至つたのだ」と「今から考へれば私は其罪を懺悔せずには居られない」として掲載されたことから、これに反論。9月8日付東京日日新聞で「小生が記者に対して云いたる事と相違し居る」と全面否定した。さらにこの寄稿文では第3回で仲間の獅子内謹一郎と泉谷正勝が「野球商売人」と決めつけられたことに敢然と反論する一方、「野球商売人」を「軽蔑するものに非ず、野球に熟達する者が学校卒業後野球商売人になりたればとて如何に不可なりや」と世に問うている。河野は米国遠征で野球のプロフェッショナルに大いに触発されていたのである。河野はまた「職業に貴賤なし」と述べており、そこに安部磯雄の影をみる。

河野はやがて押川清や橋戸頑鉄らと語り、安部の後押しで日本最初の職業野球「日本運動協会」を創設するが、1911年時点ですでにその萌芽があったように考える。ただし学生野球への過剰な人気は弊害となっていることに憂いをもっていた。⁽²⁹⁾

東京朝日の連載は9月19日付の第22回を最後に突然、打ち切りとなる。押川ら天狗倶楽部の正論もあり不買運動が起きたことから上層部の判断で唐突に休止したと考えてよい。そして大阪朝日新聞はこの「野球其害毒」を報じず、傍観者としての立場を貫いた。ただ単に別資本であったことのみが要因であったとは考えづらい。

3.3. 「野球其害毒」の置き土産

1915年7月1日、大阪朝日新聞は1面に社告を掲げ、全国の中高等学校の代表を集め「全国野球優勝大会」を主催すると宣言した。いまに続く「夏の甲子園」全国高等学校野球選手権大会の始まりである。

背景には関西で盛んになっていた中高等学校の野球大会があり、電鉄会社が沿線に造成したグラウンドがあった。提案したのは有馬箕面電気軌道（後の阪急電鉄）運輸課社員の吉岡重三郎（後

(28) 横田順彌：「快男児押川春浪」

菊幸一：前掲書p.100～p.122

坂上康博：前掲書p.109～p.168

有山輝雄：前掲書p.42～p.67

秦真人・加賀秀雄（1990）「野球害毒論争」（1911年）の実相に関する実証的検討－

新聞各紙の論調分析を通じて.Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports 13.19-31

八木一弥：前掲論文

(29) 坂本邦夫（2020）紀元2600年の満洲リーグ.岩波書店、p.20～p.32

横田順彌：「快男児押川春浪」

に東京宝塚劇場社長)である。経営の先頭に立つ専務小林一三(のち阪急電鉄社長)を中心に沿線に造成した豊中運動場の担当者として、運動場を会場に中等学校野球大会開催を企画、大阪朝日新聞本社に持ち込んだ。機を同じく大阪朝日には第三高等学校(三高、現・京都大学)野球部員小西作太郎(後に朝日新聞常務)と高山義三(後に京都市長)による京都・大津地区中等学校野球大会の開催が持ち込まれており、これを社会課長の長谷川如是閑、社会課運動係の田村省三らが検討し、全国野球優勝大会開催に至る。⁽³⁰⁾

広報・普及を担当するメディアと沿線に施設を保有し輸送を担当する電鉄会社の結びつき、新聞社には部数拡大、販売網の拡張、電鉄には沿線のイメージアップと輸送費収入というメリットがあった。そして中等学校という全国に展開する教育機関の参画は野球人気の拡大も意味する。日本初のメディアスポーツの誕生であり、「みる」「みせる」ことを十分に意識したメディアイベントの幕開けであった。

東京朝日新聞が「野球其害毒」を展開して4年、なぜという思いが誰しもにある。大阪朝日新聞がこれを報じていないからとはいえ、同じ朝日である。違和感を封じ込む方策は「物語」であった。連載打ち切りで東京朝日の敗北は明らかではあったが、野球の弊害批判は未だ燃り続いていた。大阪朝日の“知恵者”たちはそれを逆手にとり、「職業化せる米国野球の直訳ではなく、武士道精神を基調とする日本の野球」という新たな物語を創りだした。

武士道精神という一高精神野球を思うが、有山輝雄は『甲子園野球と日本人』において「優勝劣敗の勝利主義、徳育・気力重視の精神主義、校風発揮の集団主義」の原理は「引き継がれていくが、それに加えて、集団への献身と「敢闘精神」が強調されだした」と指摘。「大会ごとに、「犠牲的精神」「敢闘精神」を体現した選手たちの美談が、新聞によって作られて、広められていくことになる。さらに、そうした精神が、野球の技術、戦術にまで浸透していくことになったのである」と記している。犠牲バント、犠打が戦術にあたり、「腕もおれよ」という表現が敢闘精神を鼓舞した。⁽³¹⁾

前述した通り天狗倶楽部は「ゆるやかな連帯」の集団ではあったが、根底には武士道精神が充満していた。何よりリーダーの押川春浪は武士道精神の権化であり、理論的支柱の安部磯雄は運動選手が学ぶべき倫理を「武士道」であると説いて華美に流れがちな野球選手たちを戒めている。天狗倶楽部のメンバーは大阪朝日が提案した新しい物語を受け入れ、協力していく事に時間はかからなかった。河野安通志は野球規則に詳しい球界の先駆者として審判委員を務めた。橋戸頑鉄は大阪朝日新聞社員として運営と規則制定に加わり、飛田穂洲は読売新聞や報知新聞で健筆を揮ったのち、1926年に東京朝日新聞社に入社、その理論は「学生野球の父」とアマチュア球界であがめられることになる。しかし朝日新聞の軍門に下った感は否めない。

大阪朝日新聞社長村山龍平は第1回大会前夜祭でこう話した。「さきに東京朝日が野球亡国論を起こして学生スポーツ界に問題を提起したが、本社はここに考えるところあり、学生の純真なアマチュア精神を善導して青年の意気高揚をはかりたい」と述べた。根底にあるのは「販売部数の拡大」に過ぎないが、武士道を基に造られた物語がみる者を酔わせ、「みせる」仕掛けが観客を増やしていく。⁽³²⁾

第1回大会には全国10地区に73校が参加、各地区優勝校が豊中運動場に集い、1915年8月18日から5日間にわたって覇権を競った。それから108年、2023年大会地方大会出場は3744校3486千

(30) 有山輝雄：前掲書p.70～p.115

朝日新聞社編著(2019)全国高等学校野球選手権大会100年史.朝日新聞出版、甲子園編
阪急ブレーブス・阪急電鉄編(1987)阪急ブレーブス五十年史.阪急ブレーブス・阪急電鉄

(31) 有山輝雄：前掲書p.70～p.115

(32) 朝日新聞社大阪本社社史編集室編(1953)村山龍平伝.朝日新聞社

ーム、少子化が進む社会あって前年より38校61チーム減少しているものの、成功したメディアイベント、スポーツイベントとしての評価は変わらない。あの「野球其害毒」の置き土産といってもいい。⁽³³⁾

4. 次に続く、短いあとがき

天狗倶楽部とは何なのか？ そんな思いから調べを始めたものの、なかなか解にいきつかない。おおまかにはスポーツ愛好家が勝手に集まってきた集団であり、多士済々さまざまな志向をもった人たちが共通して何か事にあたるのではなく、それぞれが勝手気ままにスポーツを楽しみ、遊んでいる「ゆるやかな連帯」の集団であったことはわかる。そして彼らは「みる」ものに対して意識を払っており、「みせる」意識も備わっていたと考えてよい。ロゴマーク入りのユニホーム着用、観客席を備えた京浜電鉄による羽田運動場建設にあたり委員としての意見具申を行っている。この運動場に関しては保有者ではなく管理運営に携わり、現在でいう指定管理制度に似通った形態であったと考えられる。

また彼らの自由闊達なさまは明治という時期にうまれた高等遊民の姿であり、それでいてスポーツ、とりわけ野球に生真面目に打ち込む様子もまた明治の若者像である。どこか司馬遼太郎描く『坂の上の雲』の若者たちを彷彿とさせるのは野球という競技のなせる業であろうか。そして正岡子規が「無数の遊びあれども特別に注意をひくほどのものなし……(中略)……愉快とよばしむる者ただ一ツあり。ベース、ボールなり」と随筆『筆まかせ』に記したように彼らは野球を「愉快に」遊んだ。⁽³⁴⁾

そうした彼らであったからこそ野球を冒瀆されて怒る。ゆるやかな連帯が一丸となって反論した「野球其害毒」論争は生真面目な彼らの証明である。彼らの反論によって論争が盛り上がり、逆に野球熱があおられ「野球による青少年の善導」を掲げて中等学校代表による全国野球優勝大会創設に至る。全国大会開催は論争の副産物であり、もし天狗倶楽部による真っ向からの反論がなければ果たして開催に結実しただろうか。京阪神地区だけの小ぶりの大会で終わっていたかもしれない。主催の大阪朝日新聞社の本音はあくまでも「新聞部数の拡張」であった。⁽³⁵⁾

本音を“覆い隠す”手段としての「武士道精神を基調とする日本の野球」の実践は天狗倶楽部の野球リーダーたち橋戸頑鉄、押川清、飛田穂洲、河野安通志の琴線に触れた。彼らは進んで生まれたばかりの中等学校野球大会の基礎固めに奔走するのである。橋戸は大阪朝日新聞記者で熊本の第五高等学校（現在の熊本大学）野球部員だった和田信夫の意を受け、第1回大会の審判委員を務めた河野とともに「野球規則」制定の中心人物となっている。飛田はさらに「武士道精神」に則った野球の普及に努め、朝日新聞の傘の下に入り学生野球の興隆に尽力していく。⁽³⁶⁾

しかし彼らの志向は必ずしも同一ではない。橋戸は東京日日新聞に移り、1927年都市対抗野球大会の開催に傾注する。早稲田大学時代、安部磯雄に引率されて海を渡った米国で見知った職業野球が都市を基盤にフランチャイズで野球リーグ戦が運営されていたことの日本での実践に他ならない。そして河野は押川、橋戸と語り安部の薫陶もうけて1920年日本初の職業野球団「日本運動協会」を創設し、その設立趣意書にこう述べた。

「目的とは何ぞや即ち日本にも米国の如く職業野球団を作る事でありました。野球の益々盛に

(33) 朝日新聞

(34) 復本一郎編(2022) 正岡子規ベースボール文集. 岩波文庫, p.42

(35) 早房長治(2018) 村山龍平. ミネルヴァ書房, p111~p.114

(36) 大和球士(1977) 真説日本野球史 大正篇. ベースボールマガジン社, p.77~p.86
朝日新聞社編著: 全国高等学校野球選手権大会100年史.

なる事は吾人の最も喜ぶところではありますがこの盛なる機運に乗じて職業野球団を作らざれば学生野球のみ盛となり遂に日本の野球は変態となりはせぬか。此変態的旺盛とならんとするを押しへれば野球は沈鬱し、沈衰すれば所謂角を矯めて牛を殺すことになる」と云ふのが吾人が職業野球団を起さんとした主張の一で而も其重なるものであった」

河野は学生野球とかつて米国で見たプロフェッショナルの野球と切り離し、エンタテインメントの要素は職業野球団で担い、学生野球を学校対抗戦のような本来のありように戻したいと考えたのである⁽³⁷⁾。余談ながら安部との関係は河野、橋戸により強く現れ、飛田との関連は薄いように映る。安部によって実現した早稲田大学第1回米国遠征に飛田のみ参加していないことは大きな意味を持っているといえよう。

ただこうした彼らの動向は天狗倶楽部の持つ多様性の具象であり、精神主義と教育を重要視した飛田を除けば、職業野球球団の創設や都市対抗野球彼らが平岡熙と平岡が創設した新橋アスレチック倶楽部に根源を持つ「みせる」意識の顕在化であったと考える。そうして「みせる」意識はいよいよプロ野球創設へと向かう。そこには鉄道的小林一三（阪急電鉄）、新聞の正力松太郎（読売新聞）というふたりの興行師的な側面をもつ天才経営者の登場を待たねばならないが、平岡と小林、正力をつなぐものとしての天狗倶楽部の立ち位置はもっと光があてられてよいと考える。ちなみに押川清と橋戸、河野と飛田の4人は安部とともに野球殿堂に顕彰されている。

(37) 坂本邦夫：前掲書、p.42～p.48